

# 「ふと」と「ふいに」

——わがこと・ひとごとの世界——

大槻 美智子

キーワード：ふと、ふいに、わがこと、ひとごと

## 1 はじめに

### 1.1 問題の所在

「わがこと・ひとごと」という概念を文法論の中に持ち込んだのは、渡辺実 1991 である。たとえば、よく知られた事実だが、嬉しい・悲しい・楽しいなどは、「私」の述語になっても、「彼は嬉しい」のように言うことはできない。このように、「話手『私』のことを述べることは出来ても、他人『彼』のことを述べることの出来ない」性質の語を「わがこと」性を有する語と呼び、「ぶ厚い／おとなしい……」などを「ひとごと」性を有する語と呼ぼうと言う (p.96<sup>1)</sup>) のである。さらに渡辺は、形容詞だけでなく助動詞や副詞、代名詞においてもこのような概念を適用できることを述べている。

今ここでとりあげようとする、副詞「ふと」と「ふいに」にも、わがこと性・ひとごと性が存在するというのが、本稿の主旨である。この二語は、川端 1983 では「(二つの事態間の関係時間量ではない。) 一つの事態が実現する、時間的とも言えるその仕方を表現するもの」として、「突然」の類に括られている。事態が突然起こるという意味では「突然・いきなり」なども同類である。「突然・いきなり」は、下のように眼前にない事態も表せるが、「ふいに」は使えない。(以下、括弧内には例文の引用元とそこに書かれている説明を記す。? は不自然または不適合であることを示す)

相手の予定が突然変更になった。(基礎日本語 1: 状態の激変)

相手の予定がいきなり変更になった。(基礎日本語 1: 状況の流れとしての手順を踏まずに一足飛びに)

? 相手の予定がふいに変更になった。

「ふいに」は「具体的な行為、具体的な内容場面での体験を表わすのに用いられ、感覚に直接訴えないような行為、現象には用いられない」(ことばの意味 3, p.168) という。この点は、次のように「ふと(ふっと)<sup>2)</sup>」も同じである。

黒い人影がふいに目の前に現われた。

黒い人影がふっと目の前に現われた。

このように、使われる場面が似通った二つの語「ふと」と「ふいに」の相違を、わがこと性とひとごと性に見出そうと思うのだが、それには、いくつかの限定を付す必要がある。

その説明に入る前に、この二つの語について、国語辞典や類義語辞典ではどのようなことが言われてい

るのか、表1にまとめて記しておきたい(表中の下線は本稿筆者が付した)。参考にした書籍とその略称(下線部)は以下の通りである。

- 『基礎日本語 1』(1977) 角川小辞典 7 角川書店(森田良行著)
- 『基礎日本語 3』(1984) 角川小辞典 8-2 角川書店(同上)
- 『現代副詞用法辞典』(1994 初版、1999 再版) 東京堂出版(飛田良文・浅田秀子著)
- 『類語例解辞典』(1994) 小学館
- 『新明解国語辞典 第六版』(2005) 三省堂
- 『日本語 語感の辞典』(2010) 岩波書店(中村明著)
- 『明鏡国語辞典 第二版』(2011) 大修館書店

表1 辞典類における語釈

	ふと	ふい(に)
基礎日本 1(ふと) 3(ふいに)	考えるまでもないちょっとした簡単なこと。何気ない軽い事柄をいう。 <u>予期や前ぶれなしに</u> 、あるいは、 <u>ほとんど無意識に、いきなりちょっとした現象が生じたり、軽い行為を起こしたりするさま</u> 。 [ふっと]と促音化して用いることも多い。	動作の主体は人とは限らない。純然たる自然現象や無意志性の行為(略)などの例も見られ、使用の幅はかなり広い。(略)マイナスの事柄に「思いがけない」「思いもよらない」「意外だ」の気持ち加わり、さらにマイナスの結果が添うという限定された状態のとき「不意に」が用いられる。
類語例解	<u>何の脈絡もなく、ちょっとした思いつきやきっかけで行くさま</u> 。	動作や行為が突然なさま。 <u>予想・予期しないことが起こるさま</u> をいう。
新明解	なにかの拍子に(これといった理由もなく)その事態が起こる様子。「不図」は借字。	<u>予期しない時(所)</u> 。
語感		思ってもいないことが前ぶれもなく起こるようすをさし(略)客観的な「突然」と違って、 <u>心の準備ができていないための驚きを感じる人間の側に立った表現</u> 。
明鏡	<u>何とはなしに</u> 。 <u>ちょっとした拍子に</u> 。「不図」などと当てる。	<u>思いがけないこと</u> 。突然であること。だしぬけ。

以上を簡単にまとめてみると、「ふと」が、何とはなしに脈絡もなくちょっとした拍子やきっかけ、思いつきでその事態が起こることを表わし、「ふいに」は、話手(書手を含む<sup>3)</sup>)が(まさかそんな事態が起こるとは)予想や予期していなかった事態が生じることを表わすという違いがあるとされている。これは、日本語の母語話者であればほぼ違和感なく受け入れられるだろう。

しかし、ここで問題なのは、誰が誰(何)の行為(変化)を予期していなかったのか、あるいは誰のちょっとした思いつきやきっかけで誰(何)の行為(変化)が起きたのかという主体の問題である。わがこと・ひとごとは誰の行為について述べるかによって決まるからである。これを考えるために、まず考察の範囲を限定しておきたい。

## 1.2 考察の範囲

『基礎日本語3』は、「ふと」を次の三つに分類している<sup>4)</sup>。簡略化して次に示す。

(1) 外界の現象に対して用いる場合（物の現れ消える現象のほか、軽い動きにも用いられる）

「ローソクの火がふっと消えたかと思うと、背後から人の近寄る気配を感じた」

(2) 本人自身<sup>5)</sup>の行為に対して用いる場合

a、身体行動（「ふと……すると、……」の文型をとる例が多い。何気なくある身体的行為をしたところ、思いがけない状況がそこに展開するという場合に用いられるのである。）

「人の気配を感じてふとうしろを向くと、見知らぬ男がこちらを見ているのであった」

b、精神活動（今までほかのことに気をとられていたり、全くそのことには心が至らなかったようなおりに、突然あることが心に浮かぶのである。偶発的な意識活動と言っている。）

「ふと人の気配を感じた」「ふと名案を思いつく」「ふとさみしくなる」

以下、例文の（ ）には引用元を記す。検索機能を使った用例には、N（NLT）、少（少納言）、青（青空文庫）の略号を使用する<sup>6)</sup>が、語順を入れ替えるなど若干の修正を加えていることがある。無表記は自作例である。

(1) は事物が主語になるものである。ほかにも、次のような例がある。

「棚の人形がふと動いたような、そんな錯覚にとらわれた」（基礎日本語3）

「展望のきかない尾根を黙々と歩き続けた僕の目の前に、ふと焼山山頂の標識が現れた」（山レコN）

「ブッダエアー機が滑走路をプ〜〜〜〜と滑ってフと停まる」（S木A子の旅記録ネパール横丁N）

これらはいずれも事物が主語になるので、わがことでもひとごとでもなく、よそごととして、考察の対象からはずしたい。語義も、(1) に属する「ふと」は、古語にも見られる、動作のすばやさ容易さを表わすものである。(2) ab では、その解説に、「何気なくある身体的行為をしたところ」「ほかのことに気をとられていたり」「心が至らなかったようなおりに」とあるように、ある行為や精神活動が生じる時の人の意識を表わす語であることがわかる。「ふと」を「不図」とあて字をすることがあるのは、(2) の用法から生じたものであろうと推測できる。人の意識を表わす(2) の用法と、同じく人の予想予期に反することを表わす「ふいに」について、わがこと・ひとごと性を検討しようと思う。

## 2. 分析と考察

### 2.1 人の身体的行動の場合

ここでは、動作の主体が人で、かつ述語に身体的行動が来る場合を検討する。「振り向く、顔をあげる、見る」などの身体的行動には自己制御が必要という意味での意志性がある。以下、〈他者の行動〉〈自身の行動〉と分けて記述する。わがこと・ひとごとは、自他いずれの行為について述べるのかによって決まるからである。なお、〈他者の行動〉とは、三人称・二人称が主語になる場合、〈自身の行動〉とは話手自身が主語になる場合である。

## 〈他者の行動〉

『副詞用法』(p.467)に次のような例文と注記がある(ただし、以下の叙述の都合上、順番を入れ替え、番号を付した)ので、そこから見てみよう。

- ① 彼はふいに立ち上がった。(ずっと座っていたのにどうしたんだろう)
- ② 彼はふと立ち上がった。(彼は立ち上がる理由を自覚していなかった)

①「ふいに」では、「立ち上がる」のは、話手にとって他者(「彼」)であり、話手は「彼」の行動を予期していなかったという意外性を「ふいに」に託して表現している。「ずっと座っていたのにどうしたんだろう」というのは、話手の思いであって、行為者「彼」の思いではない。つまり「ふいに」は、他者の行為に対する、話手の評価や感情を表わすと言える。「フイニを使うと、『私』の心理状態を表現しているという感じがある」(ことばの意味3 p.169)というのはこの現象を言っていると解される。

一方、②「ふと」では、「立ち上がる」のは同じく「彼」だが、注記に「彼は立ち上がる理由を自覚していなかった」とあり、また同著に「主体の無意識の暗示を伴う」ともあるように、「ふと」は、話手の意識ではなく行為主体(「彼」)の意識を話手が描写する語となっている。

ここまでをまとめれば、「ふいに」は、他者の行為に対する話手の評価、「ふと」は、行為主体の意識の描写ということになる。いずれも三人称が主語(行為者)の文が成立するので、主語という形式だけを見ていると、どちらもひとつごと性があるように見える。しかし、①②では使用場面に差がある。

たとえば、②の文を話し言葉にして、「隣の人がふと立ち上がったんで、驚いたよ」は不自然である。不自然だというのは、「ふと」が行為者の意識を表わしているとみた場合、不自然だということで、(1)の諸例と同様、単にすばやさというフトであれば、この表現も自然である。

人の行動でも三人称の場合は、基本的には、擬態語の意味を持つようである。たとえば、「その外人は夜中病室にふと現れるのだという」(怪談百物語 N)、「青年がふと窓から顔を出した」などには、行為主体(外人・好青年)の意識は感じられず、(1)の外界の事物と同じように、動作の素早さを示す「フト(ふっと)」の例と考えられる。しかし、上の②の「ふと」には「彼」の内面の意識が感じられる。これは、②が小説の語りの世界のものだからと言えるだろう。

一方、「ふいに」を話し言葉にした、「隣の人がふいに立ち上がったんで、驚いたよ」はそのままで自然である。①②はどちらも文章語だが、①が話し言葉でも使えるのに対して、②は話し言葉にすることができない。②は小説の語りの表現だからである。

小説の中でなら成り立つ表現を考察の対象にするかということについては、基本的には否である。

渡辺 1991 で、不適合とされる「彼は嬉しい(悲しい/楽しい……)」も、小説などの三人称の語りの中では、まったくあり得ない表現ではないと思われるし、①②の例文のように、過去形「彼は嬉しかった/悲しかった/楽しかった…」にすれば、許容度はあがるだろう。とすると、渡辺の「わがこと・ひとつと」は、小説などの語りにおける表現は除外していると言えるからである。

たしかに、「彼は嬉しい」と「彼はふと立ち上がる」が、三人称全知の語りの中でどれほど多用され得るかと考えれば、おそらく後者の方が多いと思われる。これは、「嬉しい」と「ふと」の文中における役割の差によるものだろう。つまり、「嬉しい」は述語であり文の中心であるために主語に対する制限が強

く働く。一方、「ふと」は、述語である動詞が要求する人称のもとで、その行為者の意識を描写する従属的な立場でしかないという違いに拠る。

上で見たように、三人称主語の文が基本的にすばやきの意味を持ち、かつ他者の意識を表わす②の文が小説の三人称語りになしか見られないとすると、「ふと」を、「本人自身の行為に対して用いる」「行為主体の意識を話手が描写する」とするのは、意義を広げ過ぎていると言える。

実際のところ、話手は自分の意識や感情はわかるが他者の意識や感情は感知し得ない。だから、日本語では、「(私) 嬉しい」と言えるが、「彼は嬉しい」とは言わないというのが日本語の表現上の基本的なスタイルである。つまり、話手が感知できる行為者の意識とは、話手自身(「われ」、一人称)が基本である。小説の表現では、話手が語り手の地位を得て、登場人物の意識を「わがこと」のように語るができるが、それ以外では、「ふと」は他者の行動については述べるができないと言える。以上より、小説の語り手の例は、考察から省く。

### 〈自身の行動〉

①②の「彼」を「私」にしてみると、「ふと」のわがこと性、「ふいに」のひとごと性ははっきりする。たとえば、次のように「私」が主語(行為者)の場合「ふと」は使えるが、「ふいに」は不自然である。

- ③ ? 私はふいに立ち上がり、窓の外を見た。( ? 私はずっと座っていたのにどうしたんだろう)
- ④ 私はふと立ち上がり、窓の外を見た。(私は立ち上がる理由を自覚していなかった)

『副詞用法』にならって③④の( )に解説を入れてみた。

③「ふいに」は、(小説の語り以外で)話手である「私」を主語にとることはできない。一方、④「ふと」は行為者である「私」の意識を、話手(私)自身が表現していて、自然である。

「ふいに」が、一人称(「私」)を主語にとらないことについては、『ことばの意味3』に、「(フイニには)それらの現象、行為の生じ方への〈驚き〉が含まれている。自分の意志で行う行為には〈驚き〉がないのが普通であるから、自分の行為には用いられない」(p.169)とする。しかし、驚きというキーワードは二次的なものではないだろうか。すでに多くの辞書にあったように、「話手の思ってもいないこと、予想していなかったこと」という点が重要である。自分の行動について、次はこう変化するだろうと予測しかつそうならなかったという状況を想定することは困難である。よって、「ふいに」は「私」を主語にとらない。

ただし、次のように、私の行為が他者の予想に反するという状況を設定すれば、「私」でも「彼」でも、それを主語にすることができる。

- ⑤ 私がふいに顔をあげたので、皆が驚いた。(「私」という人物はずっと下を向いていたのにどうしたんだろう)
- ⑥ 彼がふいに顔をあげたので、皆が驚いた。(「彼」という人物はずっと下を向いていたのにどうしたんだろう)

予期をするのが話手ではなく、周りの人物である場合、話手は、自身の行動か他者の行動かに関わりなく、予期をする側に立ち、主語の行為が思いがけないものであることを表現することができる。『ことばの意味3』が、「フイニは〈その現象・行為の影響を受ける人間〉の側の視点に立って、それらに対しての〈驚き〉を表わしているのである」(p.169)とあるのは、このことを言っているのだろう。

以上のことをまとめてみると、「ふいに」は、話手が予期した他者の行為への意外性を表現する場合(①)と、他者が予期した行為者(自他の区別なし)への意外性を話手が語る(⑤⑥)という、二つの場合があることがわかった。以上、述べたことを表にしてみると、次のようになる(表2・3)。小説の例は省く。

**表2 「ふと」**  
行動者と意識主体との関係

意識	行動者	話者	他者
話者		○(④)	

**表3 「ふいに」**  
行動者と予期主体との関係

予期	行動者	話者	他者
話者			○(①)
他者		○(⑤)	○(⑥)

たとえば、表2は横軸に行為者(つまり主語)、縦軸に行動を予期する者をおいた。この表から、「ふいに」は他者を主語にとることが優勢であり、かつ話者(「私」)を主語にとることがあるという構図になっていることがわかる。「私」を主語にとることができるので、形式的にはわがこと性があると言えるだろうが、「ふと」のわがこと性とは異なる。「ふと」は、話手が話手自身の行動意図を描写するのに対し、「ふいに」は他者が話手の行動に対して行った予測を、話者が語るという構造であるので、同じわがことでも、「ふと」とは異なる。「ふいに」のわがことを「擬似わがこと」としておきたい。なお、⑥における行動者の他者と、予想する他者とは異なる人物である。

「ふと」の結果も表にしておこう(表3)。横軸に主語、縦軸に行動に顕現するまでの意識主体をおいた。「ふと」の場合は、行動者と意識主体は一致していなければならず、話者は他者の意識を語ることはできない。「ふと」は、わがことに属する語と言えるのである。

ここまでの観察をまとめると、「ふと」「ふいに」の意義特徴は次のようになる。

「ふと」……行為主体である話手自身の意識を、話手が描写する(わがこと)

小説の語りなどでは、行為主体自身の意識を語り手が描写することがある。

「ふいに」…他者の行為について、話手や話手以外の人が予期していなかったことを表わす(ひとごと)。

話手自身の行為について、話手以外の人が予期していなかったことを表わす(擬似わがこと)

結果、その際生じる感情(驚き・批難・あきれ等)も付加されることがある。

さらに付言しておきたいことは、「ふと」が自らの行為に対して抱く意識のことである。上記例文②の「彼はふと立ち上がった」の説明に、『現代副詞用法辞典』の「彼は立ち上がる理由を自覚していなかった」という解説をあげた。「ふと」は、自分(行為主体)がその行為をなぜするのが自覚できないまま

に、行動するというわけだ。ただ、もう少し言葉を補うと、何か自分の中に、そう行動する必然やなりゆきのようなものを感じているのだが、それを自覚できないということではないだろうか。

空もからりと晴れていたし、私たちはぶらぶら歩いて途中の景色を見ながら山を下りるから、と自動車をことわり、一丁ほど歩いて、ふと振り向くと、宿の老妻が、ずっとうしろを走って追いかけてきていた。(太宰治「姥捨」)

死に場所を探して歩いている、嘉七とかず枝のあとを、(寒さを凌ぐための衣服を持たない二人のために)「うちで紡いだ」という真綿をもって追いかけてきてくれた宿の老妻。「振り向く」という行動をおこしたのは、老妻の走る気配が、嘉七の意識のどこかにあったため、あるいは宿を出るときから、自分たちの計画が気付かれているのではないかというかすかな懸念があったためだ、と私たちは読む。この部分が、「ふと」ではなく、「ふいに」にであると、「振り向く」ことが予期されていない状況の中で、突然その行為が起こることになり、嘉七の行動の裏にある微妙な意識を表現することができない。このように、はっきりと自覚できないが、ある意識によって行動したと表現するのが「ふと」の働きである。

## 2.2 人の精神活動、生理・感覚現象の場合

2.1で人の身体行動の場合について、「ふと」と「ふいに」の主語や語義の違いを見るため、両者を比較するという方法で述べてきた。ここからは、2.1で得られた両語の違いをベースにおいて、それぞれの語ごとに検証するというスタイルをとりたい。ここで検討するのは、人の精神活動、生理・感覚現象である。

### 2.2.1 精神活動の場合

精神活動の述語としては、「考える、感じる、思う、気がつく、思い出す、息を吹き返す(意識を取り戻す)」(以上『基礎日本語』)のほか、「気弱になる、不機嫌になる、愕然とする、いらいらする、胸騒ぎがする、腹が立つ、虚しくなる、嫌な予感がする、考え直す、考えがよぎる、思いつく、うれしくなる、恐ろしくなる」などがある。

#### 「ふと」

「ふと思う／ふと考えがよぎる／ふとうれしくなる／ふと気弱になる」など、話手自身の精神活動を述語とする用例は多い。そして、ここで使用される「ふと」は、2.1でみたのと同様、それとはっきり自覚していないが、何か自分の中に、そう思うあるいは感じる必然やなりゆきのようなものがある。

- ⑦ 元気が出なかったり、落ち込んだり、ふとさみしくなったりしたときに(昔の録音を)聴き直すと、自然と笑顔になる(今井うさ「おぞよもん暮らし」N)。
- ⑧ 多吉は、(略)ぞろぞろと近づいて来る一団を眺めてゐたが、ふと、明日は日曜だつた、と思ひ出すと、(略)(北條民雄「邂逅」青)
- ⑨ 父はふとむなしくなって、仕事をやめたのだという。

⑦は話手自身の感情について述べており、わがこと性を有している。三人称主語が可能なのは、⑧のように、他者の意識について、あたかもそれを知っているものように語る小説の場合か、⑨のように、小説ではないが、「という」があとにつくことによって、文全体が「わがこと」から「ひとごと」化するために、三人称主語が可能になる場合などである。これらの例によって、「ふと」のわがこと性がそなわれるものではない。

### 「ふいに」

- ⑩ 幸せなはずなのに、ふいにさみしくなるときがある。(自分も予期していなかった感情だが)
- ⑪ 若者はふいに両親のことを思い出した。(若者自身が予期していなかった思いだが)
- ⑫ 弟はふいに不機嫌になって口を噤み、何処かへ行ってしまった。(話者や話者を含む周囲が予期していなかった態度だが)

2.1の身体活動では、話手が自分のことを「?私はふいに立ち上がった」とは言えなかった。しかし、精神活動では、⑩のように、話手は自分がある感情を抱くことや、ある考えや思いつきを持つことを、思いがけないことだと表現することができる。「ふいに」は、精神活動においては、わがこと性を有するのである。

感情や考え・感覚は、いつそれがどのような形で現れるのか予測できない部分がある。だから、話手は自分の精神活動を主語にすることが可能になるのだろう。この結果、精神活動が主語になる用法⑦、⑩では、「ふいに」と「ふと」が容易に入れ替わり、ニュアンスの差もはっきりしなくなる傾向がある。

⑪は小説の例だが、他者である「若者」の感情・思考を、若者自身が予測し、それを話者が述べるもの。精神活動における「ふいに」のわがこと性からして、この他者は同一でなければならない。⑫は話者が他者(弟)の心の変化を察知し、それが話者や話者を含む周囲の予期しないものであることを、話者が述べるというものである。

以上を表にまとめておく(表4・5)。小説の語りの例は省く。

表4 「ふと」  
精神活動者と意識主体との関係

	精神活動	話者	他者
意識			
	話者	○(⑦)	

表5 「ふいに」  
精神活動者と予期主体との関係

	精神活動	話者	他者
予期			
	話者	○(⑩)	○(⑫)

### 2.2.2 生理・感覚現象の場合

生理・感覚現象としては「目覚める、眠くなる、喉が渇く、空腹を感じる、胃(心臓・胸・腹・足・頭など)が痛くなる、咳が出る、お腹が鳴る、汗が出る、呼吸がとまる、痛み(暑さ・熱さ・寒さなど)を感じる、かゆくなる」などがある。

「ふと」

私を主語にして「ふと」を使おうとしても、言えるものはわずかである。「?ふと咳が出る」「?ふと胃が痛くなる」「?ふとお腹が鳴る」「?ふと汗が出る」「?ふとかゆくなる」「?ふと呼吸がとまる」などは「ふと」と共存しない。感覚や生理反応などは、人間の制御の外にあるため、精神活動の時より、生理的反応や感覚が起こるのに必要な必然やなりゆきのようなものを感じるのは難しいのだろう。「ふと」が使えるのは、次のような場合である。

- ⑬ ふと目覚めるともう日が高く昇っていた。
- ⑭ いいにおいが漂ってきて、私はふと空腹を感じた。
- ⑮ 意識が戻ってきたのか、ふと痛みを感じた。

⑬では、昼になり日射しの強さや暖かさをぼんやり感じていること、⑭ではいいにおいが漂ってきたこと、⑮では意識が戻ってきたということが、生理的・感覚的な反応を生起させる必然になっていると思われる。そういう状況が設定されれば、「ふと」は使えるようである。

「ふいに」

- ⑯ 私はふいにはげしい痛みを感じた。(ことばの意味3)
- ⑰ ゴルダがつれてきた乳飲み子がふいに泣き出した。(篠田浩一郎『閉ざされた時空』N)
- ⑱ ふいに父の呼吸が止った。(ことばの意味3)

精神活動と同じく、⑯の「ふいに」は、話手に生じた感覚に対して、話し手自身の予期していないものであることを表現している。⑰は小説の例だが、他者(乳飲み子)の生理現象をその場に人物たちが予測していなかったこと、⑱は他者(父)の生理現象を話者が予測していなかったことであることを表わしている。以上を表にまとめておく(表6・7)。小説の語りの例は省く。

表6 「ふと」  
生理・感覚現象と意識主体との関係

	生理・感覚	話者	他者
予期			
	話者	○(⑬~⑮)	

表7 「ふいに」  
生理・感覚現象と予期主体との関係

	生理・感覚	話者	他者
予期			
	話者	○(⑯)	○(⑱)

精神活動、生理・感覚現象は、人がコントロールできない(非意志的)現象であるため、話し手自らの心情、感覚・思考も予測できない事象として、「ふいに」で表わすことができるというのが、身体行動の場合との大きな違いである。一方、「ふと」は、もともと話し手自身の行動意識を描写する語であるため、みずからの精神活動、生理・感覚現象が生起する際の意識をみずから説明することに変更はなかった。「ふと」は、わがこと性を失うことはなかったのである。

ここまでの観察を、「ふと」「ふいに」の語義という形でまとめておく。

「ふと」……精神活動、感覚・生理現象の主体である話し手自身の、それが生起するまでの意識を、話し手が描写する語(わがこと)

「ふいに」…話手自身の精神活動、感覚・生理現象について、話手が予期していなかったこと表わす（わがこと）

他者の精神活動、感覚・生理現象について、話手や話手を含む周囲が予期していなかったことを表わす（ひとごと）。

### 3 まとめ

「ふと」と「ふいに」の相違を、人の身体行動、精神活動・生理感覚現象と、分けて考察してきた。「ふと」は、話手が、自己の行為や精神活動・感覚について、話手自身の意識を述べるという意味で終始「わがこと」性を有していた。「ふいに」は、身体的行動においては、話手の予期に反する他者の行動を述べるができるという意味で「ひとごと」性を、他者の予期に反する話者自身の行動について述べるができるという意味で「擬似わがこと」性を有していると結論づけた。また、精神活動・感覚においては、他者の精神活動・感覚について話手（話手を含む周囲）の予期に反することを述べる「ひとごと」性と、話手自身の精神活動・感覚について話手の予期に反すると述べる「わがこと」性を有していることがわかった。

「ふと」と「ふいに」は、イキナリ、突然に、ある行動や思考・感情の変化が生じる時に使われるのだが、「ふいに」は、誰かの予測とは異なるという意味でのイキナリであり、「ふと」は、話手のさまざまな意識の交感の末に出現するイキナリを表わす。川端 1983 が「一つの事態が実現する、時間的とも言えるその仕方を表現するもの」と言ったように、「ふと」と「ふいに」は、時間そのものの表現ではなく、実現する事態と、人の予測や意識とのずれがもたらす唐突感なのである。

その意識や予測が、誰のもので、誰の行動や状態について述べるができるかで、わがこと・ひとごと性が決まる。「ふと」(1)の外的事象や他者が主語を省く)は、「わがこと」専用の語と言える一方、「ふいに」において、わがこと・ひとごとの性質は不変ではなく、述語の性質に応じて変わることを確認した。「ひとごと」専用の語は「乏しいようで」(渡辺 2000, p.98) がある。

#### 注

- 1) ページ数は、渡辺実 2000 に拠る。
- 2) 『基礎日本語3』に「『ふっと』と促音化して用いることも多い」(p.268) とある。
- 3) 「ふと」「ふいに」は、『現代副詞用法辞典(ふと)』に「ややかたい文章語で、日常会話にはあまり登場しない」とか、『語感の辞典(ふいに)』に「さほどくだけていない会話文や文章に使われる、いくらか古い感じになりかけている表現」とかあるように、くだけた日常会話では使用されない。よって本稿では「話手」という用語を用いるが、書手を含んだ意味で用いる。よって聞手も読手を含んでいる。
- 4) 『基礎日本語3』の分類には、(1) (2) のほかに、「(3) (「ふとした」の形で) 取るに足らないちょっとしたこと」を立てているが、ここでは連語は扱わないので、除外している。
- 5) 「当人自身」というのは、『基礎日本語3』においては、人称には関わりなく、詩や小説の全知的語り手の表現も含めて、話手(語り手)が注目し中心にしている人物の動作とその際の無意識性を客観的に物語る文を対象とした場合の解説だと見られる。本稿では、詩や小説における表現は分析の対象としないので、「当人自身」というのは一人称者と同義に用いる。
- 6) N-NINJAL-LWP for TWC (ニンジャル・エルダブリュビー・フォー・ティーダブリュシー、略称 NLT) は、「日

本語のウェブサイトから収集して構築した約 11 億語のコーパス『筑波ウェブコーパス』(Tsukuba Web Corpus: TWC) を検索するためのツール) <http://nlt.tsukuba.lagoinst.info/>

少—KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス「少納言」<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>

青—「青空文庫」<https://www.aozora.gr.jp/> の Google 検索

7) 「ふと見ると」「ふと思う／思いつく」などは、「ふと」のもっとも典型的な表現と言ってよいだろう。

この慣用的な表現につき、作家の多和田葉子に興味深い文章がある(『カタコトのうわごと』)ので、それを紹介しておきたい。(時制に関わる興味深い一文もあるが、それはここでは省く)。

和独辞典で「ふと」を引いてみると、直接の訳語は載っていない。代わりに、実用的な訳文例がいくつか載っている。「ちょうどそちらに目をむけると、その時」「全く偶然に,」「気がつくと,」「歩いて行くと急に」(略)「これという理由も目的もなく,」一つの単語を訳すのに、ずいぶん苦勞しているのがわかる。しかし、理由がわからないからといって、「全くの偶然」として説明するのは、違うような気がする。第一、あることにある瞬間、気がつくのが偶然であるはずがない。何か遠い記憶や。目に見えない存在間の交感が働いているに違いない。「わたしが目的を持たずに理由もなしに、そちらを見ると、全く偶然に、木の葉が黄色くなっていることに突然、気がついた。」というようなことではないような気がする。(pp.54-55)

#### 引用文献

川端善明 1983 「副詞の条件」『副用語の研究』明治書院

渡辺 実 1991 「『わがこと・ひとごと』の観点と文法論」『国語学』165号 (渡辺実 2000 『国語意味論』塙書房所収)

多和田葉子 2007 「『ふと』と『思わず』」『カタコトのうわごと』青土社

#### 〈辞典類〉

森田良行 1977 『基礎日本語 1』角川小辞典 7 角川書店

國廣哲彌ほか 1982 『ことばの意味 3』平凡社

森田良行 1984 『基礎日本語 3』角川小辞典 8-2 角川書店

飛田良文・浅田秀子 1994 初版、1999 再版 『現代副詞用法辞典』東京堂出版

遠藤織枝ほか 1994 『類語例解辞典』小学館

山田忠雄ほか 2005 『新明解国語辞典 第六版』三省堂

中村 明 2010 『日本語 語感の辞典』岩波書店

北原保雄編 2011 『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店